

わたしの京都

若冲と蕪村―錦市場

河野裕子

先日、台北への短い旅に行った。あるレストランで皮蛋が出て思わず声が出た。皮蛋というのは、アヒルの卵を塩や灰などに漬けた中国料理の食材である。

皮蛋といえは錦市場へと思いが飛ぶ。高校一年生のとき、わたしの学校では食物の授業というものがあつた。皮蛋が必要になり錦市場に買い出しに行った。錦市場に行けば無いものは無いと教えられたからである。以来、皮蛋といえは錦市場、錦市場といえは伊藤若冲へと連想がつながるようになった。彼は三百年前の、錦市場の青物問屋の息子であつたが、世に疎く、問屋の二階に籠つて絵ばかり描いていたからである。

伊藤若冲の絵を一目見て、こんな絵があつ

たのかと強く惹きつけられたのは何年前のことだつただろう。それは、「紫陽花双鶏図」という絵で、鶏と紫陽花を描いたものであつたが、描かれたものはその辺に居る鶏や紫陽花とは別物だつた。極端に激しく勢いがあり、デフォルメが過剰で色彩が華麗で一度見たら忘れられない。

それからは折あるごとに若冲の絵を気をつけて見てきたが、この画家の絵はあまりに個性が強烈であるために、見る者によつてはつきりと好嫌が分かれるようであつた。若冲といえは、奇想とも繁縷ともいえる異様な絵である。一般的には思われているようだが、拓版画を知ってから、わたしはますます若冲が好きになつた。拓版画の白と黒だけのシンプ

ルな世界。その中でもわたしは植物が好きで、朝顔の図を見たとき、細長い葉と、葉よりも小さな花とその扁平なかたちに驚いた。解説を読んで、これは半野生の朝顔で、花の色は藍色であることを知ったときはうれしかった。野生の朝顔は、若冲が生きていた頃には暮らしの周辺にまだいっぱい生えていて、彼はそれが好きだつたのである。

若冲の生涯についてはあまりよく知られていない。師であり詩僧であつた相国寺の大典禪師の寿蔵碣銘（生前に建てておく、その人の功績を讃えたお墓の銘）によると、若冲は、学問をせず、文字をよくせず、絵を描くこと以外は、世間一般の人の欲望を持たず、生涯独身であつたという。これがどこまで本当か

分からないが、若沖の絵を見てみると、世人を離れた風変わりな人であったことは確かな気がする。

二年前の十一月頃だったと思うが、京都国立博物館で「伊藤若冲展」があった。わたしはどうしても行きたかったが、病後のことであり、人なかに出て行く自信がなかった。迷っていたが、最終日に車椅子に乗せてもらって行くことになった。話が大きくなって、家族と息子の一家と総勢六人がゾロゾロと出かけていったが、最終日ということもあって大変な人込みに閉口した。展示室はうす暗いうえに、車椅子の位置からは絵が見えにくい。見たい絵が幾つもあったが仕方がない。代わりに大冊の画帳を買って帰り、幾夜も眺めたり解説を読んで楽しんでいたが、それが今行方不明。

二日がかりでどこをどう探しても出てこない。本は何の拍子にか隠れてしまうことがあり、ある日とんでもない所からひよっこり現れる。本には本の霊や散歩癖があるのだろうか。

何かの折にふと気がついたのだが、若冲と与謝蕪村はふたりとも享保元（一七二〇）年の生まれ。蕪村は俳句だけではなく絵もよくしたが、同じ京都の、しかも近くに住まいしていたのである。蕪村は若い日には各地を転々としたが、後半生は仏光寺烏丸西入ルに暮らしていた。蕪村は「白梅に明くる夜ばかりとなりにけり」を辞世の句として六十八歳で世を去った。若冲は八十四歳まで生きたから、京都で何年かを同時代者として生きたはずである。若冲と蕪村は会う機会は無かったのだろうか。あつても会わなかったのかもしれない。

錦市場に昨日行ってきた。市場の東の突き当たりにある錦天満宮を、もう一度確かめておきたかったからである。この前行ったとき境内には梅の花が咲き蕪村の句があったような気がするのだが、それが確かかどうか。梅の木はあったが句のほうはなかった。若冲も蕪村もこの天満宮には必ず詣ったはずだ。鳥居が民家のあいだにニヨキリと建っているのに気づき驚く。

錦市場は往き帰りしながら、一軒一軒お店屋さんを覗くのがたのしい。川魚の店には生きたドジョウやスッポンがいた。スッポンを見たのは何年ぶりのことだろう。卵屋にはやはり皮蛋があった。

この小路のどこかで、雑踏の音や売り手の呼び声を聞きながら、三百年の昔、ひたすら絵を描いていた人がいた。市場のざわめきの中に居ると、三百年くらいは一跨ぎの時間のように思われてくる。

鶏の眼は赫く描かむと若冲が眩み憑かれて歩きし小路 河野裕子「体力」

見て歩くだけと思つて出かけた錦市場だったが、わたしは鮭の切り身と茄子の胡麻和え、薩摩あげなどを買ひ、二千円ちよつとのお金を使った。（かわの・ゆうこ「塔」選者）